全裸のエレベーターガール
頑張るサラリーマンたちの疲く股間を癒す
超高層ビルの淫乱サービス

全裸のエレベーターガール
頑張るサラリーマンたちの疼く股間を癒す
超高層ビルの淫乱サービス

ビルや商業施設が立ち並ぶビジネス街の真ん中に、ひと際目立つ超高層ビルがある。

207階建て、そして高さはなんと約1000メートル。

当然ながら数多のオフィスが入っており、働くサラリーマンの数も非常に多い。

そしてこのビルでは現在、大胆なサービスが実施されている。

それは、

“全裸のエレベーターガール”

通常のエレベーターがある正面入り口とは逆側に、累計50の小さなエレベーターがある。広さは1.5メートル四方くらいで、まともに入れるのは多くてせいぜい4人といった感じだ。通常のエレベーターと同様、外に面した部分はガラス張りで景色が一望できる。ピンク色の壁に、床は濃い目の肌色マットレス。全体の雰囲気がエロティシズムを醸し出しており、昼でこそその淫靡な雰囲気は目立たないが、夜になれば電気はつかずうす暗いエレベーター内に赤いライトだけが付くため、まるでラブホテルの室内の片隅ようだ。

そしてその個室のようなエレベーターで働くのが、全裸になったエレベーターガールたち。彼女たちは皆、厳選された女性だ。

毎朝、地下一階にある専用の事務所へやって来た女性たちは更衣室で衣服を脱ぎ捨て、すっぽんぽんになってその日割り当てられたエレベーターへと足を運ぶ。

そこが、彼女たちの“職場”なのだ。

基本、彼女たちは高給で雇われているが、ここ最近ではこの仕事が有名になり、且つ高ステータスの仕事としての色合いが濃くなっているため、例え給料を減額してでも働きたいと申し出る美しく魅惑的ボディを持った女性たちが増えているのが現状だ。
時代は不安定な経済社会の波にのまれている。
サラリーマンたちの多くは生き生きと働いてはいるが、やはり労働時間は多く、肉体的疲労も溜まっている。
そんな彼らが忙しさと裏腹に持っているのが性欲だ。
どれだけ忙しくても、そこは男の本能というもの。
“働く男性たちの疼く股間を癒す”
そのために自らの体を使ってサービスをするのが裸のエレベーターガールたちの役割なのだ。
基本、出勤時と退勤時にサラリーマンたちはこのエレベーターに乗り込む。朝は働くための精力づくり、あるいは欲望を発散させてスッキリして体を軽快にするため、そして退勤時は仕事を終えたご褒美と、そして何より“癒し”。
そういった目的を持ってこのエレベーターに乗り込むのだ。

そしてこの日も朝日が昇り、街は動き出す。夜間、ひとときの休息をしていたこのビルの大部分も稼働し始める。
そして時刻も7時を過ぎた頃になると、サラリーマンたちエレベーターガールたちが出勤してくる…。
「よしっ！昨晩は取引先の書類がようやくまとまってくれたからな。あとは顧客の勧誘をどうするかだけだっ！！今日も忙しいぞ！」
背筋を伸ばし締めたネクタイの結び目を確認しながら、20代前半の若手サラリーマンの糸川俊喜（いとかわとしき）がオフィスのあるこのビルにやって来た。正面入り口とは反対側に回り込み、屋内へ入ってエントランスを通り過ぎ、奥へと足を進めていく。
仕事をする気概に満ち溢れている彼。
しかし、もちろん彼が入るのは“通常のエレベーター”ではない…。

ちなみにこのサービス用エレベーターは、サービスを受ける時間を確保するため通常のエレベーターとはまるで別物のようにゆっくり上がる。そして、あくまでこのエレベーターの目的は働くサラリーマンのサポートであり、最終目的が仕事である以上、目的の階につけばそれ以上は出来ないのが決まりだ。
よってその短い時間にどれだけ濃密に裸のお姉さんと出来るか、それが勝負なのだ。
ちなみに、152階のオフィスへ向かう糸川の所要時間は約20分だ。

ブィィィーーーーーンッッ！！

ボタンを押すと自動扉が開いた。
「はぁいっ！！今日もおはようございますっ！お仕事頑張って下さいね！」
満面の笑みで元気よく迎えたのは、プリンプリンと巨乳の揺れる短い黒髪が健康的なエレベーターガールのミハ。年齢は23歳だ。
「じゃあ早速お仕事前の“一抜き”いきましょっかっ！！フフフッ！！」
そう言うと、まるで猫が餌のおねだりをするように糸川の前で腰をかがめ、足元に膝をついてしゃがみ、彼が穿いた灰色のスラックスの股間を右手でさする。
「いやぁんっ！お兄さんもうおっきくなってますわよぉ！」
「仕事前に‥ちゃんと気持ち良くなりたいって･･･うぅうっ！“ここ”が言ってるみたいです！！」
「そのとぉりですわっ！じゃあ遠慮なくお顔を見させてもらいますわ、このおちんちんのっ！」
ミハの細やかな手つきは手慣れたもの。彼女は良質ぞろいのエレベーターガールたちの中でも特に“たまらない”との評価を受けている子である。

速度を変えることなくスローペースで上階へと上がっていくエレベーター。
ガラス張りの向こうには広い街の景色が見えている。
ビクンッッ！！
「あらぁっ！やっぱりすっごぉい！やっぱり元気にバリバリ働く大人の男性ですわっ！おちんちんもすっごく元気だわぁ！！」
嬉しそうな黄色い声で糸川のペニスを褒め、ミハは頬を桃色に染める。
ビクビクビクンッッ！！
「ああぁっ‥‥やっぱり何度乗っても恥ずかしいな‥‥んくっ‥‥」
「そんなぁ！な～んにも恥ずかしがらなくていいんですわよぉ！！元気な証拠証拠！！今日もバリバリ働く体力のあるお兄さんの証拠ですわ！！」
ミハは微笑み、目を輝かせる。

「じゃあいただきまぁぁぁす！！！」

「パクッ！！」

「ンジュジュパァァッ‥ジュバッ‥‥ブチュルルブプゥ‥ジュパチュブパァッ‥‥ハムチュルブポォ‥チュブブチュロルルル、ンチュバプゥ‥‥んはぁあぁん‥‥美味しぃ‥‥おっきぃオチンポォォ‥‥チュバブゥゥ‥‥ムチュルブパァ‥‥チュブブチュルルル‥‥」

体験版はここまでです。
もし気に入っていただけましたら、
続きを製品版でお楽しみいただけると幸いです。